# 新編水滸畫傳

初編

21
875
1

へ21
875
1-90

唐本百回本翻譯

餘台曲亭翁編譯
葛飾北齋主人畫

# 新編水滸畫傳 初編 全十冊

へ
875
1

浪華書林 岡田羣玉堂製本

## 水滸序

水滸一書七十回為一百八人作列傳或謂東都施耐菴所著或謂越人羅貫中所作皆不可知要不過編輯綠林之劫殺以示戒也原其意蓋曰之百八人者非宋朝之亂臣賊子耶苟生堯舜之世井田學校各有其方皆可為耳股肱奔走禦侮之具不幸生徽宗時或迫飢寒或逼功令遂

875



相率而為盜耳作者之旨不責下而責上其詞蓋深絶而痛惡之其心則悲憫而矜疑之亦有關世道之書與宣淫導慾諸稗史迥異也近見續文獻通考經籍誌中亦列水滸且忘義命之又不可使聞於鄰國試問此人者始而奪貨繼而殺人為王法所必誅為天理所不貸所謂忠義者如是天下之人不盡為盜不止豈作者之意哉吳門金聖歎及而正之列以第五才子為其文章妙天下也其作者示戒之苦心猶未闡揚殆盡余則補其所未逮曰水滸百八人非忠義皆可為忠義是子輿氏祖述孔子性相近之論而創為性善之意也夫

順治丁酉冬月。桐菴老人書於醉眠堂墨室。

案此書全傳百回、或百二十回、別有後傳四十回、而今罕傳焉、聖歎以爲始石碣敷妖、而終石碣收妖、是所以七十回爲正本也、然而此書續七十回、則閱者尚似有遺憾、是以取全傳百回、以金氏批注及兩三本彼是校定、而編譯應書肆之需云尔、

皇和文化乙丑年重陽前五日書于飯岱芸堂

曲亭外史



社稷逞令雲擾〻兵戈到處鬧
挨〻高俅新伝雜怯恨洪信徒
今釀禍胎
古人交誼勝黃金心若同時誼
亦深水滸請看忠義士死生能
守歲寒心

九紋龍史進

乎人少殺
至立猶
憐才

一閃鉤子頭子軍
當和尚
砂高俅
君真不了事

鉤子頭林沖

雀符有神機内含
籌莫展
千秋讀史
人掩卷增百感

神機軍師朱武

力健聲雄
性粗鹵丈
二長鎗撒
如雨鄴中
豪傑霸華
陰陳達人
稱跳澗虎

跳澗虎陳達

腰長臂瘦力堪姥到處刀鋒亂撒花
閑立華山真好漢江湖名播白花蛇

白花蛇楊春



好殺
畫數一
百八

豹子頭林冲

花榮

小霸王周瑜

林冲

譯水滸辨

降こ妙こまこ五月西の暮りんとしこくへ又一隆あこくなりつ。十日あまり廿日ころおぼつこあこくも。ちぢし山の挾よ内き出るゆゑ。書肆ふこり成文堂衆皇閣とふふ丸予ゞ柴門を敲こ。ねんごろ丸乞ひあり。その故を問へば彼が家よ藏るところの更本水滸畫潛覽ハむし鳥山石燕が筆のまそびよ水滸傳の人物を寫し。その傍丸國字をりこ。車の槩略を記せり。上木既ゝ三十年未普く世丸行ひとゝ。粗漏丸していまゞ婦女童蒙の目を欺まろふ足こまゞ。しかて今新丸予ゞ譯文を乞こ。彼更潛覽丸根き。水滸の更本を板せんといふ予嘗水滸傳を讀ふ食を忘れこ厭こふ。燭を秉こ倦こきなり。この書や。變化の妙。宛轉の奇。むのづこ志ろこの丸こ。作者一生の精神。半世の英氣を竭し。文章一家をなこ。他書とおゞろふゞ。おゞをこ

白頭の宿儒あり。こゝを病アリ。況予が管見をもて此書を譯んいと景護
志ある人あり。著述ハ予が好ところ。水滸も又予が愛ところ。事二ツあゝ難助
あゝ。固辭ス能はず。乞ふて再三あゝ。やうやうけ引つ僅ニ五
二本を校讎して。忽卒ニこゝを譯せさるあひだ書肆ハ亟ニ北齋翁と
ハ。予も一面のよしゆへハやうて彼ハ就く。卷のところ〳〵ハその像を
出す。繡像水滸傳の摸樣ニ擬せ。且金聖歎が議論ニ從ひ。今忠義乃
両字を省き名つけ〳〵水滸画傳といふ。抑この事一朝諾あひくゝ。書肆
毎日ニ詣まつ求ること急ハ〳〵。終日去〳〵ず。前ニ画工備書あり。後ハ
剛氏あり。一頁草〳〵ハ二頁做書〳〵。二頁草〳〵をハ二頁刻〳〵。ひとゝ
數月あ〳〵ず。初編十卷功を終語路の盈縮魯魚の錯誤〳〵正ニ
是あ〳〵ず。こゝ是兒戯の一端ニ成る。閲者幸ニ予を論ずるこゝ勿れ。

〇水滸の一書ハ曩ハ冠山岡嶋老人飜譯の功なり。以降我俗始て
世ニこの奇編あるのを知る。惜べしこの書近曾舞馬の難ハ
係る。數百の版面烏有に帰す。ちなみに婦女童蒙
なほ解ずこゝ〳〵するものハこの書漢文のゆゑ調ニ倣ひ片假名をもて記せば
なゝ〳〵。とまれ人纔ハこの意を譯〳〵。その文の美を譯せるニ至ふて。
とれふでう冠山老人本来の面目なるんや。實ニ己〳〵を得ざり〳〵とおぼし。
彼俗子の書を讀をこゝまハ只傍訓ニ因〳〵字義ニ貫〳〵ざるニ讀と
〳〵も肚ハ味ふ〳〵あ〳〵。耳ハ聞く却て感ずること有り。故ニ一人讀〳〵きて
五三人とまを聽。耳を側つるのこの意通ぜざるハ〳〵。賞ぜ〳〵難
うふこゝをり〳〵俗ハ説ふ。これいまで其爲ところを知ふざるなり。今予この
譯ところハいふ〳〵雅ニ遠〳〵しと。別ニ華本を編譯〳〵。絶〳〵冠山老人
の筆ハ根〳〵ふく。只顧婦女童蒙の爲ニ解〳〵やすきを宗とす。知うれ。

艶麗の句風流の泥あり捨るゐ忍さで。その但見玉をつゝね〳〵。當時を見るべき〳〵きハ敢〳〵漏さゞしゝこれを譯し。但その藝を茂闕〳〵を補ひ泥わゝを正し。疑しゝを決し。一統してり〳〵大成さゝその傍訓のゞきゝ至くハ音訓ゐ骨ふゞゝのあり。譬バ記書を讀〳〵勅書とし。僧人を讀て法師と。日本紀ゐ僧を禪杖を讀〳〵鹿杖とし。和名鈔。僧坊の目〳〵。鹿杖あり。和名加勢都惠。その物異なりとゝ〳〵。姑〳〵ホフシ〳〵訓ずゞ。金剛を讀〳〵二王とし。嶽廟劉李王を讀〳〵美嶽神社とし。人氏を讀〳〵住人とし。商議を讀〳〵談合〳〵するの類枚挙ゐ遑なし。これ傍訓ハ字の注あり。ゝゝせゞゐハ耳ゐ代りのゐ諭しがゝし。且唐山の俗語我譯さるゐ。我俚語俗言をり〳〵せゞゐハ平等さゞ。又和名のなき物あり又和訓の施しゞゝきゝのあり。その譯さゝきりのハ本文の熟字を抄出し。甚譯すべ〳〵ざるのハ我私の筆ゐ操る。この故ゝ一編の文章古雅と今俗と混雜して更ゐ格體を定めゞこれ予が情願ゐハあゝまで。實ゐ已しゝを得ざれバなり。



○水滸傳ゐ十三箇の文法あり。所謂倒挿法夾叙法大落墨法綿針泥刺法背面鋪粉法弄引法獺尾法正犯法畧犯法極不省法極省法横雲断山法鸞膠續絃法。これなり。この文金聖歎ゞ外書ゝ舒て詳なり。和漢文章を異ゐゝさゝといへゞも。纔ゐその意を学〳〵これを譯せり。

○水滸傳の作者究〳〵詳ゐ〳〵ゞ。或ハ施耐庵ゞ筆なりといひ或ハ元人施耐菴ゞ筆なりといふ田叔禾ゞ西湖遊覽志ゐ又ゝ〳〵ら〳〵この書宋人の筆ゐ出ず曾金聖歎。七十回ゝり後を斷く。羅貫中ゞ續ところゝゝを。因〳〵ゝを極〳〵羅氏を誣。復僞ゝ〳〵施氏ゞ序成前ゝさゝゝゝ。按ずるゐ當初の作者。ゝゝ〳〵小說ゝ序し〳〵。姓名を露さ車。あゝべ〳〵もあゝゞゝをり〳〵人の疑を惑りゐ。細〳〵ハ後の條ゐ

ことを陪ぶ。又續文獻通考に羅貫中水滸傳を作りて世を誣の報ひ二世の子孫ふ啞なりしを載せり。果して百零八人は寓言ハ耐菴が筆に起こる。七十回の後より羅氏が續りのあるべ天も人を罰するに私ありといふ欲羅貫中姓ハ羅名ハ貫字ハ本中今の人貫中を名とするものハ悟なり。蓋やこの人當時の賢才にして却て時に遇ず一旦憤を發して私に二國志演義と忠義水滸傳とを著して事を彼に託して志を已に舒ぶ。なほ天下の人に示せるべ。古人の議論かくのごとし。いまだいづれか是あるを知ざる。

○宋史に宋江起て盜を為す。三十六人を以河朔に横行し轉十郡を掠官軍敢その鋒に嬰とあり。知亳州知州ハ官名なり國司のごとし。知ハその列をあづかりなり候蒙上書して天子に上書しいへり。宋江が才。あるべ大に過ぎるものあるべ不如これを赦して方臘當時の大盜を討せ。ゆゆしく贖ものあんと欲す。帝まことに候蒙に命じて東平府の知州に任じて卒しぬ。又張叔夜に命じて海州に時に宋江海州に至る叔夜間者をもてその向ところを覘まるに宋江径より海濱に趨く。却て鉞斧十餘を獲を載叔夜北をきわめきる士千人を近城に伏おきて輕兵を出して海に距てこれを誘戰せ先壯卒を海旁に匿兵の合まるを伺ひつつを舉てその舟を焚賊これを仰ぎ乘じて賊の副將軍を擒にして宋江乃降参せり。按ずるに彼三十六人の星ハ二十六人をりて横行せしに擬せ又宋帝宋江に方臘を討せるに事ハ候蒙が上書に擬せ。これこの書寓言にして大に據なり。加旃。二十六人の姓名ハ具に宣和遺事に載せり。未生の人を談ずるは

あらざるよし。呂門が外書ゐいへり。

○宋の洪邁俗考に云く。鐘聲一百八撞とあり。十二月。二十四氣。七十二候ゑ應ず。又尾崟漫錄ゐ釋氏の念珠。一百零八とれ年ゑ七十二候十二月。二十四氣あるゐ準といへり。志うれば水滸の百八人もこの數ゐ依りて星の數ゐ合せきりておぼし。他者さうゐを用ふの精細。されば一條ゐ云へもきくし。

○今この書中ゐ筆まる全像數十頁ゑまぐ兵錄ゑ圖するところは百八人は像ゐ根きこ或ゑ聖歎外書二本ゑ圖するところの宋公明以下四十人の像を摸し或ハ李卓吾評点は全像二十頁のおもむきゐ倣ひ是ゑ重ゑの今案を加え洞色しきゐ生せり。且武備志より以下の圖譜取るべきあるべきとれゑ据ゑ重しもとへも。家宅械器衣服ゑ取りて。



ゐ用ふの形を審ゐせざるの多し。とそもりて日本ゆきこうところあきはしもあらざる。余曾華人の圖まる三國志水滸傳ゐの人物をゑゑゐ漢宋の人ゐ韃清の服を被ゑるもなり。亦是憑空結構の戲墨なりゑ足べき。この書もゑ云う。閲者理をりゑ論ずるこゝあれ。

○ある人ゑこの著作堂を訪ふ。水滸傳両三卷を閲しつ。是を難じていへら。王望如が評論金聖歎が外書世りゑ奇絶と稱ず。志うを足下。今百回本を取ゑ譯まるへ。いかゞやとゆへ。余ゑいへり。聖歎原錦繡の才ゑとゆへども。國字をりゑ譯するゐ當ずてハ他が批注も却ゑ用ふ。且余ゑ淺見をりゑこれを論ずるゑきハ。聖歎が外書取べきゑあり。又取べきゑあり。とありて嗚呼なれど試ゑその三を云べ。他ゑ小說を評する毎ゐ動まれば聖歎経傳を引く。是余ゑうげゑしする一ッなり。他ゑ三國志を評して以へ

ら〳〵吾謂。支子書の目宜し三國志演義をもつて第一とすべしといひ。又水滸を評するに至りては大なる三國志と西遊記を誚ふこれ二ツ他まことに〳〵。水滸傳は鬼神怪異のものを說ぐ。是他筆力人を過ること如何ぞいふ水滸なほ〳〵鬼神怪異の事なしといへども洪信石碣を開き百八の魔君を走らせ宋公明九天玄女に遇ひ天書を受るごときは正史曾有の怪異なるもの。是二ツ他又以て史記と水滸傳とを同じうして施耐庵一肚皮に宿怨をいだき以て〳〵この書を爲者の胸中。これその何等か寃苦あり〳〵かるまで言を一百八人に設るを知らざるいふ是四ツ。かくの如き韓論一定せざる他又百八の人物その賢愚を論ずるに至りては假を弄して眞とあまねく過ぎり況貫華堂所藏古本水滸傳施耐庵が自序に稱すれば類疑〳〵聖歎が僞作あるいは何をか〳〵是を考るいふ。又是他が西廂記外書の序說あり者破せり。その文こゝに抄するに及ばざるこゝ〳〵せば他書を併て〳〵べし。かくいへど聖歎の外書を取ざるあるまで他是校讐飜譯集成する事。既に前にこゝろ〳〵わり。答るまで。難まるものあざ笑ひて。好〳〵び共にいはざりすべし。

乙丑季夏の日蓑笠隱居うそね〳〵筆を飯岱の著作堂に採は

# 新譯水滸畫傳初編十卷目錄

靈根號

前帙五卷初回至第四回之半


卷一　張天師祈禱瘟疫を禳ふ　洪太尉誤て妖魔を走ひ

卷二　王教頭延安府て走は

卷三　九紋龍史家村を鬧す

卷四　史大郎夜華陰縣ゑ走は　魯提轄拳て鎮關西を打

卷五　趙員外重て文殊院を修す


後帙五卷第四回之半至第十回


卷六　魯智深大て五臺山を鬧す　小覇王酔て銷金帳て入る

卷七　花和尚大て桃花村を鬧す　九紋龍赤松林ゑ剪徑す　魯智深尾鑵寺を火燒

卷八　花和尚倒て垂楊柳を拔　豹子頭誤て白虎堂ゑ入

卷九　林教頭刺て滄州道へ配る　花和尚大て野豬林を鬧す　柴進が門ゑ天下の客を招く

# 卷十

林冲が棒洪教頭を打
林教頭風雪山神廟
陸虞候草料場を火焼

初編十卷鬻ぶ稿を脱す。今ぶ至り〳〵両ヶ月。風人いまだ全功を終ず。実ぶ渚君子の徴を辱するを以て。書肆すゝめ彫梓成ところの五卷を發兆し後の五卷未春續〳〵發き行なんと欲ふ。いうせん。今この前快五卷の如きハ百八の列傳僅ぶ五人ぶ過ざるをもて。一書の大意ぶ明ぶ述るぶ足る。されども毎歳新編發兒の日。大凡十一十二月の際を期とするが故ぶ。予もまたふく否ぶあらざるを。遂ひに校正〳〵これを許せり。こゝをもて後の五卷ハ別ぶ標目を出さず。蓋十一回より以下ハ十卷をもて一帙とするゆへなり。抑古人の書を著すや。毎〳〵若干年の想を布。若干年ハ杼を儲。又復若干年の経營點竄一。志の〳〵後稿を脱するこゝを得。この故ぶ一字の雅致あり。朝ぶ述るところ夕ぶかゝるぶ至り〳〵まで。志れども毎歳新編發誤あり。書を脱ん。閲者察せよ。

## 新編水滸畫傳姓氏

**諸生**
呉用　金大堅　蕭讓

**牢役**
柴進

**平民**
武松　史進　施恩　盧俊義　阮小二　阮小五
阮小七　石秀　解珍　解寶　燕青　扈三娘　孔明
孔亮　侯健　宋清　杜興　鄒淵　鄒閏　王定六
郁保四　段景住　李應　公孫勝

**道士**
皇甫端　安道全

**醫士**
宋江　朱仝　雷横　李雲　戴宗　劉唐
李逵　樂和　朱富　蔡福　蔡慶　楊雄

**寇盜**

朱貴　穆弘　李俊　張横　張順　朱武
孫新　裴宣　鷗鵬　鄧飛　燕順　楊林　蔣敬
呂方　郭盛　王英　鄭天壽　陳達　楊春　陶宗旺
鮑旭　樊瑞　項充　李袞　馬麟　童威　童猛
時遷　孟康　焦挺　石勇　顧大嫂　張青　穆春
曹正　宋萬　杜遷　薛永　李忠　周通　湯隆
李立

**官弁**

徐寧　楊志　索超　黄信　宣贊　郝思文　韓滔
彭玘　單廷珪　魏定國　凌振　龔旺　丁得孫　魯達
林冲　孫立

○通計一百零八人

姓氏目次完

# 新編水滸畫傳初鐫十卷

## 職役稱呼俗解

○衣服器材の類はいとぐ眼よりえざるを以推量の国訓多し固くとゝめ贅せず。

**處士**　仕ざるを處士とゝぶ。轉じて又浪人のことゝす。

**左尉**　大臣なり。堯の時舜を左尉とす。秦漢以降こゝを左尉あり宋も唐の世唐も仍て御筆改て左尉を武選とす。一品の任。節度使の上なり。元の時を尉。

**道士**　僧もあるべし。僧もあるべし。上は老子を祖とし。下は列仙を師とす。ゆえに人の司徒。司空を三公とす。鬼を驅病を禱ふものなり。本邦の山伏とゝ似たり。

**道衆**　道士

**道童**　道士の童子

**貧道**　道士の自称なり。僧あれば貧僧小僧おしべ称すべし。本邦の僧人もまれば貧道と称するのあり。道士の自称とうちべくるも。陶山なり。

**天師**　道士の長なるものをいふ。五雜組に云晉より唐に及ぶ。あるいはまぶ世業とする。我を祖皇帝の曰。至尊なるものは天。豈天師あんや。

**真人**　註上に云。謝肇淛が塵餘龍虎山の張真人及道士の法驗往々説を削りて真人とす。もろ〳〵二品の秩を後裔に伝ふ云云

**軍人**　軍人は徭役して軍の歩役に使ふ人まし皆民なれば分く解ゝ云。

**潑皮**　あれ破落戸ゝ

**破落戸**　陶氏が云破落戸をもちぶれのと訳するべしし。破落戸の賊主ゝもあれば富人ゝもいまそもちべ大きゝ訳するは悪しき説あるは尚善既に云。

**生鐵**　商賣し

**八十萬禁軍教頭**　正觀二年。辺州に経略使を置。官軍（武藝の師範する役人）

**經略使**　唐の侯の長官を尹とゝふ。總管。州尹。知州。刺史。すべて同じ。

**太公**　老主人を称

**府尹**　縣邑の長官を尹とゝふ。説ところ知の換

非使の官。知州の小吏なり。**提轄官**。知州の小吏なり。**直廳**。今の玄関番。**當廳**。和の役の番。**直廳賊**。これも人を罵りて鳥という。**直娘賊**。これも人を罵りて鳥という。**里正**。名主なり。**鄭屠**。鄭氏なり。屠は屠者なり。**官人**。官吏部。兵部。戶部の員外郎あり。又吏部。兵部。戶部の員外郎あり。本邦の民間。兵衛。左右衛門と稱す。**漢子**。單平中国の人を呼ぶ。後世男子の稱。**文墨**。富人を稱す。**幹人**。家来なり。**封鼻間**。**待詔**。鍛冶やの名。**酒保**。**莊客**。大百姓の家の名。**酒保**。**小二**。小厨の名。**道人**。僧。肉食妻帶髮を剃らず。**好漢**。好男子。**茶博士**。茶店の主人なり。**衙內**。物上の衙曹司。若殿の官人。**當案孔目**。衙前の吏職。官物六帖。**兼局**。未詳。名物六帖。兼若を訓ず。兼若の係人なり。唐の制。**女使**。**姨嬛**。了鬟。**泰山**。妻の父。**丈人**。丈夫。妻の母。**丈夫**。**渾家**。妻を娘子。**大姐**。妻を**老婆**。妻なり。老婆の形状を合点せり。

**附**

**天罡星**。北斗という説あり。螢惑の地。**慾星**。慾は殺なり。**江湖上**。世間のひろき。**莊院**。いなかの家。**朴刀**。陶氏云。短きを鎗量の流のなり。武松が高塀を越えしき。突立てこれを力三寸延

**外**

**主上**。原本天子。**都**。原本京師。**汝**。原本他。**待**。原本等。**彼**。原本那。**彼**。原本他。**等**。原本他。**彼**。原本聽。**彼処**。原本那里。**停立**。原本立在。**何**。原本甚。**詰**。原本者。**又**。原本**誘**。**告処**。**思食**。**語**。**對面**。**伴**。**聽**。**氣色**。**對申**。**侍**。**候**。以上今の世の和文用。

**職役稱呼俗解畢**

## 校定原本

李卓吾評閲一百回（和俗これを百回本と云ふ）
卓吾評点一百一十五回（これを李卓吾本と云ふ）
飜刻二十回
金聖歎外書七十回（二本あり、これを聖歎本と云ふ）
水滸後傳四十回（二本あり、今四十一回本これを取る）

## 編譯引書

宋史　武備志　兵録　事文類聚
廣輿記　大明一統志　文體明辨　五雜俎
遊仙嵐　鄉談雜字　續文獻通考　日本風土記
金瓶梅　群書纂要　日本書紀　和名類聚鈔
和字正濫要略　古言梯　水滸傳解　水滸傳抄譯
名物六帖　金瓶梅譯文　南北宋志傳　縉紳全覽

# 新編國字水滸畫傳引首

東都　曲亭主人編譯

### ○楔子

金聖歎がいふこの一回古本ハ楔子と題す。楔子とハ物をりくく物を出すの謂なり。頭ハ疫をりくく楔しまし。祈禱をこゝろみて楔します。楔天師を出す。天師をりくく楔します。楔洪信を出す。洪信をりくく楔します。楔遊山を出す。遊山城をりくく楔します。楔開碣を出す。碣を開をこゝろみて楔します。楔二十八の天罡星七十二の地煞星を出す。これを正楔といふ。中間ハ又康節希夷の二生を楔します。楔刻運定数を出す。武德皇帝。包極狄青を楔します。楔星辰の名字を出す。山中の虎と蛇とを楔します。楔陳達楊春を出す。洪信が驕情傲色あるを楔します。楔高俅蔡京を出す。道童猥權認ぐくきを楔します。これを奇楔といふ。七十回ハ皇甫が馬を相まるを結尾します。金壇王氏が小品中ハ亦云ふこの書毎回ハ楔子あり。書肆翻刻の時刪去し〻今俱ハ存ずといふ。王望如云ふ。聖歎がいふ所の楔子ハ無中の生有皆憑空の詞。これ稗官野史のてぐ〻く信ずべからざる所以なり。

中華故の宋は天子神宗皇帝の御宇ゐ姓は邵諱は堯夫道号を康節
先生といふ〳〵名高き一箇の儒者あり。世時天下大ゐ乱れ〳〵朝ゐは梁ゐ
属暑ゐは晋ゐ属合戦一日も息まきあり。彼先生あゝこれを嘆く。

紛紛五代亂離間　一旦雲開復見天
草木百年新雨露　車書萬里舊江山
尋常巷陌陳羅綺　幾處樓臺奏管絃
人樂太平無事日　鶯花無限日高眠

と口遊しゐ既ゐ梁。梁の太祖姓は朱名は晃そしてめの名は温唐。唐の太祖姓は李。名は存勗。晋。晋の高祖姓は石名は敬。漢。漢の高祖姓は劉名は暠。初の名は知遠。周。周の太祖姓は郭名は威。さて〳〵十五帝を經て〳〵播乱五十年。その後天道ゐ
や〳〵環て四海静謐すべき時節到来して。宋の太祖武徳皇帝太祖姓は趙。甲名は匡胤。
馬の嘗中武徳皇帝誕生の後。ゐ陣波すしく来る。此君生まるゝ赤光天



ゐ満異香日を徑まで。数〳〵て。廼是天上の霹靂大仙天降すしく来る。
智勇倶ゐ雙ぶしく世は天子ゐも及ぶべきゐしとの故ゐ一條の捍棒を
〳〵四百餘州を打成世界を掃清く宇宙を蕩静姓を越とし國號を
太宋と。都を汴梁といふ處ゐ建めひしく。九朝八帝の班頭四百年
開基の帝〳〵ゐ仰ぎ奉りる彼堯夫先生の詩ゐ一旦雲開復見天
と作れしは未前を察るの一句なり。その頃西嶽花山といふ山ゐ陳摶處
士といふ道高き有德の先生あり〳〵天文雲氣のゐも通達せり。一日陳摶先生
驢に騎て山を下て華陰の道中ゐ赴く折も路ゐ客人のゐ
さまをゆめば今東京の柴世宗後周の天子位を趙匡胤ゐ讓らしといふ彼先生
これを聞く〳〵歓喜ゐ堪ずまを〳〵額ゐ加え驢の背上ゐあり〳〵大ゐ笑ひ
つゐ〳〵擲下しゐば人驚き〳〵その故を問ゐ先生去り〳〵のゐを説寄せ

一條の捍棒八漢の高祖三尺の劍を以天下を治めり

天下これより定るべしといひつゝ果して庚申の年に趙匡胤天子の位に即
ひしかども不思議なれこの君位に在ること十七年にして天下太平なり。
ほどなく位を弟太宗に傳へ太宗皇帝在位二十二年にして位を真
宗に傳へ真宗皇帝又位を仁宗に傳へ仁宗皇帝諱は祐天上の
赤脚大仙の天降りとぞいふ生れつき昼夜啼哭止まざりし
朝廷より黄榜を出し人を召て療治させんとす時に天帝太白星に
託して下界に遣ひ給ふ太白金星ぜん〳〵一箇の老叟と化して前に
参り彼黄榜を揭げ〳〵それ〳〵太子の啼哭を止め進ずる者と云
榜を守る官員これを誘ひ殿下に参り備由を奏し給へば真
宗皇帝老叟を喚び〳〵太子を召せと勅諚あり。その時老叟
宮中に至り〳〵太子を抱きまゐらせ〳〵曰耳の邊に口をさし著て八箇の

天罡星地煞星の説は文曲武曲の二星を談ず

文字を低語するが太子は立地に声を止め〳〵再び啼哭なし給ふ。彼老叟
そなのれる名字をもいろ〳〵忽地一陣の清風に乗じ〳〵飛去りぬ。さて老叟
が耳語せし八箇の文字は文有文曲武有武曲といひしぞ端的是
天帝紫微の宮中より両座の星辰を差遣この天子を輔佐しまゐ
せんとなり。さて文曲星は南衙開封府主龍圖閣の大学士包拯と云
人の母應夢して武曲星は征西夏國大元帥狄青と云人の母應夢して
賢臣生まれ〳〵仁宗皇帝を補佐し給ふ。在位四十二年社間九〳〵年
号を改元し天聖元年癸未より位に登りまゐらせ〳〵天聖九年に至る
まで天下太平にして五穀豊登し万民業を楽しみ〳〵路に遺を
拾ふ者なし戸を夜閉ずして寇なし。この九年を一登といふ明道元年より利
皇祐元年に至り〳〵この九年又豊なり。これを二登といふ皇祐四年より

萬姓熙熙化育中三登之世樂無窮豈知禮樂堂鏞治變作兵戈劍戟叢水滸寨中包節使梁山泊內聚英雄細推治亂興亡數盡屬陰陽造化功

嘉祐二年ニ至りてこの九年田禾大ニ熟す。これを二登の世といへり。その時百姓世の安樂を受のさりしを。淮の元樂極りてときハ悲を生ずと嘉祐三年の春ニ至りて天下盛ニ瘟疫流行し。江南より西京ニ至るまで人民土農工商この症ニ染ずさるものなし。各州より人間ニ出現して宋の天下を鬧し得べき。請見て禍福得喪の理舒べ許の癸申ハ氏雪の飛ぶごとし。加旗槊京城中城外の軍民軍ハ軍役ニ使ふ人民死る人の半ニ過ぎ。これ人ハ米を給ひ薬を給ひて万民を救ひ多くしかども。些の驗もなく。文武の百官商議して早朝ニ帝ニ奏聞し。此天災を祈禳んとせり。この年ふりせば。二十二員の天罡星。七十二座の地煞星多の巻々ニ詳なり。

新編國字水滸畫傳引首畢

# 新編水滸畫傳卷之一

東都　曲亭主人編譯

## ○張天師祈禱瘟疫を禳ふ

異朝大宋の天子。仁宗皇帝の御宇。嘉祐三年三月三日の寅の一天ニ。主上紫宸殿ニ出御あり。朝賀を受させ給ひ。公百官禮儀を匹おの〳〵位階ニ応じて。主上を拜し奉り。恭しく庭ニ春の光げニ囲ざ浴き光景なり。時ニ殿頭官諸司百官ニ向ひて對し奉りて。奏ハ外の事ハ車ふくハ御簾を捲く。退出りくと呼ぶ。宰相趙哲。参政文彦博の二人奇〳〵別を去〳〵出ぬ今都のうち疫癘大ニ流行して。軍民百性ニ死する多の甚しく。神ぶるくハ寛〳〵仁政を布施し。大の災を禳ひ除民の急難を救ひ給へと。言葉を揃へ。参すれば。主上据也と。ゆ食ひ給ふ。勅

〻。天下の囚徒と。民間の税賦を免し。又都の寺院に命をくだし。御祈續
あり。されどもその年疫癘あり盛んにして。朝に病むもの夕べに死し。親ハ
子を喪ひ。家に男死。妻も夫に後れ。野に葬はるの類きいくばくを
以て数を知らず。是によりて。玉上いみじくれて姿をぞれば。ふたゝび百官を
會合ひ。此事いかゞしくふうんと勅問ありに。范仲淹といふもの奏するやう。
それ聖等が愚意を汲に。この災を禳んに量に。江西信州の龍虎山に神通
ふ測道行を量の道士ありその号を嗣漢天師張真人といひ。又異人と張天
師と呼ぶ。かの術法が家に天災を禳ふの秘法ありて。三千六百分。羅天大醮と名
づけ。きはめて稀なる奇法なるに。世に掲焉いてきこの道士を召のぞし。
疫鬼を懼たまひ。民の病難忽地に除去上下安堵の思ひをなさんに。又よ聖ひ
ひと悼ところあらば。等をえなんぞ。上御感ぜ〻ず。右尉洪信を勅使と。

嗣漢天師張真人を請待あるべしと定まひ。洪信に勅命を奉ず。
詔書を錦の嚢に納め。御香を玉の盒に盛て。從者あまたを召ぐして次の
日都を起行り。さて程に右尉洪信ハ頻の勅使なるを以て當日東京の地
を離れ江西信州貴溪縣を投ていそぎつ。山をハ馬にて越川をハ舟にて
渡ぬ。ゆく程に日を経て程地に至るに貴溪の縣大小の官人郭を
出て。こゝを待受。御導して龍虎山の麓に到るに一山の道衆孫〻大の
告あるしるよりて。鐘を鳴し鼓を撃。香花燈燭を捧。幢幡宝蓋茂
り連。一流の仙樂融〻として山を下り。勅使を迎ぬ。洪信を上
清宮のこなたに馬より下り。宮殿を瞻るに。松栢屈曲して風
に吟じ。樓閣參差として日に輝き。道士霞を吞の窓。仙童藥を搗の室
水を堦砌の下に流し。山ハ墻院の後に続て。鶴丹頂を生じ。かゝるに

二月二日
沂梁城ヨリ
百官
拜賀

扶ぶ亀。緑毛ゐ長し。三清殿上金鐘を鳴し。四聖堂の前玉磬響て塵外
無何有の郷なるべし。洪信只顧目を驚し。誘引甚く客殿の上座ゐ居ゐ時
住持遠路の疲勞を慰めさて勅詔の旨を問ゐ。洪信答く。今都ゐ疫癘
流行しく。死するもの十ゐ六七ゐ。きりこれゐよりく立上ふく歎セ
ゐひ。張天師を都ゐ請待しく。この病難を禳ひ除き民の塗炭を救ひ
玉ひんゐ。下宣御使をうけあつく参ゐり。張天師ハ今いづくゐ在セ
ゐや。對面いさきべしといへバ。住持こゝろを得く稟ゆう。當代の天師セ
道行尋常なるまで唯清を好て穢を惡ミ。人と交參もうきしてこゝ
山の絶頂ゐ菴を締ひ。常ゐ真を修し。性を養ひかるく世の間イ
生ゐのねバ容易見えるゝ真かなるゝもおぼへぎ。さゐ且く休足ゐん
しいひく方丈ゐ伴ひ。茶を獻せ。齋を供水陸の珍味數を調て歎待

ゐ。洪信ハ張天師。山の頂ゐ居りく輒く見えがしとゝ。その心安うゝず。
ゐさゝび住持ゐ對ひく以ゐ。張天師ハ巔の草菴ゐ在さバ。ゐ
呼ゆさゐ。天師を山中ゐ居りとゝ。住持答く。天師ハ山中ゐ居りとゝ。神通不
測ゐ。或ハ雲霧ゐ駕雲ゐ乘ゐ。又ハ峯ゐ坐し。谷ゐ居ひ其
在ゐ所定ゐ定うなるず。この故ゐ貧道ゐ。ゐく生平ゐ見えがく言
ゐ。今詔書を賜ハゐ當アく。と見を招きナゐ。ゐ人
を走せく呼び迎ゐ来ゐ。おりひもようゐひ。ゐうれども。主上ゐ民乃
病難を救ひ給ゐん爲ゐ。ゐく勅使を下し。ゐ人ゐ張天師ゐ是を
使事ゐ。ゐひまゐ。ゐ尉今一點の誠心を竭し。齋戒沐浴して深衣
を名し。從者ハ只一人をゐ召つ具ゐ。こゝ詔書を脊ゐ負ゐ。ゐ龍
香ゐ爐ゐ。ゐ歩行しく山ゐ登ゐ。信心礼敬ゐ。これを訪ゐ。張天

師もまた主上の仁慈の深きを太尉の誠忠の厚きを感じ奉り。軒に見え
えの木もありなんと人もまた太尉万民の爲に位の高きを忘れ。この
事を行ひ給へしと思へり。洪信は又太尉の召し京城を出る日より素食
して精進をぞ。御身の言葉に従へば。
巣引つ。甲夜よりその用意して。明日早旦に起出て沐浴して白粥を食べ。
浄衣を着て袴ひて。詔書を納る錦の囊を懸て銀の瓶を提て
搖りもて。麻鞋穿て。おびつうちもたして。巔を拔て立
出て。位持の絳書の道衆と共に後の山下を送り。慇懃の
路程を存をへ。山中は草深しく踏いと險し。
いかに一方民を救ふの切を建んと。耶も怠慢の心を發さじと。
己を責て登り給へり。信心怠なく。そも張天師に對面なんとぞ



說て。道ふにつのれて帰て。洪信は。紙に香を燒天尊の宝号を唱へ。
じて山の半に登て。
斜に飛藤は倒に掛て。虎嘯くと紀。風谷の口に生じ。嵯峨として山の腰
に墜さ。青鸞千の玉を深成て。なるべ。身疲て組
高て。志に停て。
食に門を列に。菌を重て。
難穿て。山路を尋て。
つ。きめて人せの。独言して。
起て。その風地上を。紀。木草に。背向に。
山も崩て。撲地と跳て。
怕て。阿呀と叫び。化て紀。件の虎を見て。白額の虎なるぞ。洪信大に驚き
毛色は黄金を盛さ

ふぐ〳〵爪ハ白銀の鉤ヨリ尖〳〵。人を射る眼の光ハ電の閃〳〵。怪き光満ち開〳〵口赤く〳〵血をなる盆ヨリ異ふ。ぶ鞭ヨ似る尾をうち揮ふ。牙を張。ぶ〳〵洪信ぶ〳〵ヨ来〳〵。右ヨ盤龍ヨ旋リ左咲こ又一声遠刻後の山坂を跳越く走り去〳〵ぶ。洪信ヨ人ごちつき〳〵おそる〳〵身を起し。投捨てる子爐を拾ひ〳〵て香を焼。僅ヨ五、三十歩行りごの〳〵襲若ヨ忍ヨ。ころの中いか〳〵焦燥。れい朝廷の大臣ヨ。上用ひの子めうを〳〵かる悪虚へ遣ヨ。許多の難義ヨあハせるふい。いのある過世の契ひ〳〵やく口の中ヨ〳〵姫〳〵詈ヨいまぐ行ていてぐなぶヨ風又俄頃ヨ起毒氣冲つく天を曝め。山邊ヨ藜き竹藤藪〳〵と響つ。その長十丈あまりの大蛇。鱗ハ月を流ヨ波瀾ふ〳〵も晃き。舌ハ暗を照〳〵ヨ篝火よりも閃き。草木を靡け〳〵すこ来ヨで。洪信魂身ヨそゞぎて。眼眩て倒ヨまり。さヨぐ彼大蛇ハこヨを天りん〳〵もせず。身を轉〳〵蟠り。首を擡舌を長く〳〵。毒ヨを洪信ぶ顔ヨ吐ちぶじて。飽ヨく驚〳〵。一溜〳〵走り退く竹藤の裏ヨ入りね。洪信ハ忘ぶし。蛇ぶるぶ〳〵ふりしぶ。忽地息出く記上り。ふく住持を怒こ〳〵。又独言りるゆ〳〵。彼悪道士勅使を紹〳〵搔獣多き悪虚ヨ賓き。かく〳〵憂目こヨ。こと安〳〵ね。これり張天師ヨ素あハぶハ。住持をたぶめ一山の奴原。その中〳〵ヨ〳〵ぶ〳〵。且怒こ且訓り。又登めんこするヨ松林の背ヨあ〳〵〳〵。笛の音隠〳〵ヨ響〳〵ぶ。漸〳〵ヨちく〳〵メえ〳〵ぶ。洪信ふく〳〵こちら奇こ。睛を定め〳〵その方を見ぶ。一人の童子ヨ黄牛ヨうちまり〳〵。當面ヨ生来ま〳〵。其形状究く俗なぶ。頭ヨ両枝の了髻を紈ヨ少ハ一領の青衣を被く。笛吹あふし行ヨ。洪信喃〳〵こと呼〳〵ぶめ。汝こ〳〵を識こ〳〵ぶる〳〵いぶ。童子莞然こ〳〵ち笑。

龍虎山ニ
張天師
ごくびび
洪を射を試

其二
新編水滸畫傳卷之一
新編水滸畫傳卷之一

笛をりく。洪信を指しくいつゝ。ゆゑ又こゝゝゝまゝるひしゝへ。張天師ゝゝ見えまゝ
わゝせん寫なり。又し今朝菴の中ゝゝありて。張天師の前ゝゝ侍りりゝゝゝ天師
はぐくりゝひしゝへ。今都のうち疫癘盛ゝゝ流行。民落命まゝるりの甚多
し。それよりて。主上洪を尉を勅使としてこゝゝを都ゝゝ招き。三千六百
分。羅天大醮の秘法を修行せくゝとの病難を禳除ゝゝゝ他。ゝゝゝれぞ
又し今。鶴ゝゝ雲を凄き。一瞬の間ゝゝ都へゆくべと宜へり。定くゝ今ごろ
い都ゝゝいそ急ゝゝひつゝあ。ゝゝ縦千辛萬苦を経く。菴ゝゝ索ゝき
ゝゝる。張天師おそ〜まゝ待べそのうひもあるまじ。この山ゝゝを猛勢
毒虫いと多以べ。りゝゝ不慮の怪あゝんも痛し。ちやく〜小山ゝゝ人
ゝゝゝゝ洪信ゝゝゝく疑ひ迷ひ。汝虚言りてこれを紛ゝゝゝあゝぬこの
といふゝ紀童子ゝ回答もせべ又笛を吹ゝきくく。林木原ゝゝ入りゝ

りる。洪信その後新を目送ゝゝ。つゝゝ。ゝゝゝ。彼童子いゝゝてふく
つこの上をべ走りつゝん。そも尋常のゝゝゝゝゝあゝど。彼ゝ張天師の命を
稟くゝ。外なゝゝその事を示せ〜ゝゝゝ。これをゝもゝゝ疑ゝ彼ゝ猛勢
の膳ゝ蔡らべ。泳念つ。こうり引入て舊の樵へ走りわれゝ住ゝ
いゝ又道衆とゝゝゝ生卯ゝ聽くゝ方ゝゝゝゝ誘ゝゝ。山中の容子を問ゝ洪信
恩地月を瞑しつゝ朝廷の貴官くして。ゝゝりくゝ山ゝ登りしゝ。
勅旋を重し。張天師を敬ゝの切なるゝゝゝ。志ゝるを滋達都くこれ
を茂ゝし。ゝゝくもうゝ世つゝゝ。鄭ゝゝゝゝ山の半ゝ至りし時白額
錦毛の虎生くゝゝを威し。志ゝ魂を消せり。次ゝ丈餘の豐花蛇
ゝゝ。つゝの行路を遮くゝ。むゝゝゝ運ゝゝく命めゝくゝ。
生くゝ都へいゝも帰らじこれ滋達勅使を侮り。潛ゝ奥を催ゝゝゝ。

行脚人幷虚無僧之一
菜紙入浩畫作者之一
弾天師
鶴の
東京に来る

いひつけあらバ又ゆかんといひきかせあらく〳〵いひ懲せバ。住持大に迷惑し
貧道おどして勅使を欺きまつるべき。まあまじきは吾術が僻ずせしにあらじ然
張天師窃に大尉の信心を試みるなり。彼山猛き獣をなして又ハ天師の徳
によりて人を傷る事なし只願くハ怒を鎮憤を散しあへてし賂るにおよ
洪信少しく解ず。この信心懈怠にハあらざりかハ辛苦をも厭ハせんや。あの山顛
までゆきて登る中に折しも笛の音隠る中に聞えしかバ只奇しくみんとせしところ
に一人の童子ありて牛に乗笛吹きつゝ出来りけれバ對ひていはく
張天師ハ今朝鶴に乗雲を凌ぎて都へ上りて給ひしかバ庵の中には
なしとかく下向あるべしといひしに任せやがてかへり来りしとそのよしをかたれバ
住持笑てその童子こそ張天師にておはしませ。忽ちにありぬるハ空からず
眼前にのいひかゝしく外にみなしまひめる進職なしと只管悔ていはく甚だ



洪信さらに實とせず。彼ハ張天師ならバなどて幼女なるべきこの頃のあ
様さしいふ事住持又いひけり當代の天師ハ童顔仙骨にして。年紀いと
いつのく見ゆれども。其ハ是額外の人にして四方にその化を顕しあらき
是しく靈驗究く灼然なれバ。世の人是を尊く道通祖師と稱る
なり。大尉あまりにも力なくして見なしあひそしバ人ハ洪信中々に曉
得さずれ眼ありながらに真の張天師を認らずまし〳〵愚なり。吾のみ世
ましく後悔ますれバ住持ありて。大尉におゐて安くおぼしめし張天師己に
鶴に乗り雲を凌ぎて都へゆかんと宣ひつれバ。今ハはや參内ありて
醮事の場に臨ミあひなん。其のうへ大尉帰京しめふ及頃にハ疫癘も
悉く禳ひ除邪民ふたふ拾むる草の雨に逢ひしごとくなるべけれバ縦張
天師に對面なくとも使はまさく上の御怨もあらじ。まづ

休息しまうとさはぐ慰こしらへるゆ洪信やうやくこころ安堵く詔書を住持ゆ遍示しるれば。住持受ようて御書匣ゆ収藏齋を供酒宴を設ふ。いまゝ彼を饗應しるとぞ

○洪太尉誤て妖魔をとらせ

洁朝早飯も果しゝ。今日遊山あるべしと。住持こゝろ促せば。洪信大きゝよろこびく居多の従者を召れ。已ゆ方丈を立出るゆ一山の道衆その左右ゆ従ひ。彼此を御導き。洪信を従彼之清殿の光景を見るゆ奇麗壮觀都ゆ又早なり。左の廊下ゆ九天殿紫微殿北極殿あり。右ゆ廊下ゆ太乙殿三官殿驅邪殿あり。太乙真君紫微大帝天丁力士南極老人二十八宿の星君。三十二帝天子の木像位階ゆよりて安置せり。洪信こゝろゝを件ゝ見て。右のゝなる廊の脊ゆ到るゆ又一ゆ別殿あり。四方の環繞ハ濕を融きゆ爲ゆ撥を搗てゝ紅泥牆ふしく。正面両の扇ゝ又朱紅の榻ゆ門の面ゆ大ふる鎖を用ゝ楚ゝ。固ゆ鎖の上ゆハ封皮を貼封皮の上ゆ又いゝへ。ふく朱印を押加へ。簷下ゆ朱紅の額を打。伏魔之殿といふ四箇の金字を写ゝ。洪信又ゝこれいふある故あるゝかゝ厳ゝ鎖ゝ。封皮を貼ゝゆやゝ問ハ。住持答ゝ。當山の祖師。大唐の洞玄國師魔王伐この殿内ゆ鎖鎮めの宝ゆよりゝ。代ゝの天師ゝ印を加へふゝ捺ゝゆ重ゝ。閉ゝ変を許ゝ慢ゝ魔王を走ゝ。時ハ忽地世の間ゆ災害ゝ。今八九代の天師を経ゝれ。洞玄國師の戒をまもり。ゆ銅の汁を用ゝ。鎖の透間ゆ鑄ゝけるゆ。誰あゝこの理の真を考ゝ。貧道當宮ゆ住持ゝ年三

十餘年ゐおのづから。只侍人ばかりを。洪信ばかりふりかへれ
ば。試ゐ麿王を見ぐるもしるひ。位持ゐ對くいはう汝達この門をひらき
いへ。これその麿王の正體をうんまくるふなりしくが位持うち驚きあい
氣躁きるものを命いりのうゑ。代この天師まこ風紀ゐまゐなきゐ貪道ゐ
ぐの分際ゐ。かるぐ。開れいんや。ゐ洞玄國師叮嚀ゐ戒を遺
し。末世の諸人漫ゐこの殿を開くこを詩ーあらんば。只もこれても怕ぐき
い祖師の遺戒ゐり。いかも果ざるゐ。洪信うやうと冷笑ひ。汝達揺ゐ怪
奇を侍へ。愚民を迷ー。假ゐこの殿を仰り設麿王を鎖鎮る稱
へる。その家の道術を顯ー耀ゐの計なふん。我弱宦より諸ゐ百家ゐ
書を讀ぐも。麿王を鎖るいふ法あるゐをゆめ。世のへいそれるもゐ
るれいなして信ーせば。誘ことの裡を一見きべといひ。更ゐうけ引

氣ゐ人なりるまいい。住持又いふ。中。右ゐ尉りこの殿を開きまるる。終ゐ天
下の患ーなりあんゐ。此ゐ案あ。ゐ。れと諫ゐべ。洪信勃然
ー声をあり立。汝達ー立地ゐ開るぞへ。それ都ゐ立ん。龍虎山
の道士等放て偽を行ひ。麿王を鎖鎮ーと稱ー。愚民を迷ー。
ゐいふ術を賣いと巻笑ーて。忽地山を追放ぜん。おほそまゐ
開くまくまくゐ目を瞋ー。臂を張つ。礙ー白眼くいひ懲せば。位持も
道衆もその權威ゐ害怕ゐ。りこの上ゐ諫諫べ。一山の滅亡を招くゐ似
きりて。俄頃ゐ奴隷火工ゐを呼び會合。彼等ゐこの夏をいひ。
く。すぐ封皮を揭ぎり。鉄鎚をりくゐ件の鎖を打碎き。一度ゐ門城神
ゐくきけくれ先ゐこと入りるぐこの殿や昏く冥くそーく。數百
年を陽の光を見ぬべ。億萬歳明月の影も瞻ぐく。既ゐ南北分

洪信慢く
鎖鷹碑を
穿く
斬開

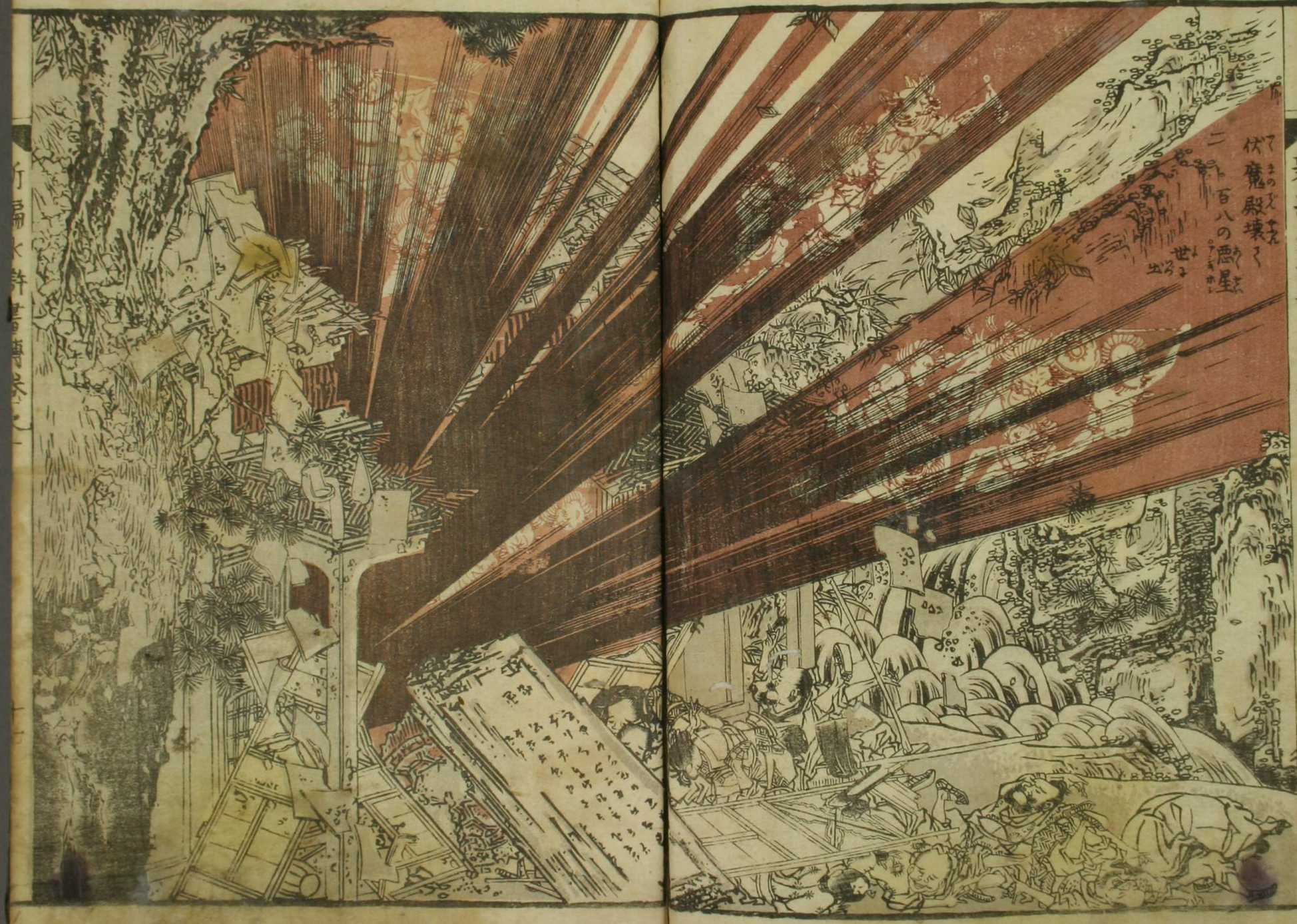
ねべまして東西を辨ず。黒煙靄々として。人を撲に寒く冷氣陰々としてまを侵に顫く。當是人跡到らざる処。妖怪往来の栖窟の目ハ開ども。却て盲の如く。両の手ハ伸せども。掌もつかえずして。常に午夜のごとく。又五更の時に似たれバ。洪信下知して居多の松明をともさせ四面にありてらしみれバ。只みへる眼に遮ぎるものなく。只殿の中央にその高六七尺もあるらんとおぼしき。石碑ありて。その下に石の亀あり。この亀既に土中に陥りて。僅に半身を顕しけり。やがて石碑の面を見るに鳳篆龍章して。世につたなるにあらざる。あやしき文字の彫つけるにハ。人皆これを讀えのなし。又その背をみるにおふ普通なる大文字を刻りて。遇洪而開と録せり。是なん天罡星。地煞星といふ星の。世に出べき時至り。宋朝に忠臣義士の顕るべき前象にして。洪信



これを開く事。洞玄國師豫て察知し。四箇の文字に示しおかれし。嗚呼是寔に天数なるらん彼忠義の人をも出さん。これを魔王に比する曲なき傍人と是をみて言を譁て魔王とし。賢人これをみれバ。称て忠義とす。是文陰正表裏の義なりさて洪信ハこの四字をみて大きに歓び。住持に對ていひけるハ。汝達且石碑の脊をみるに數百年のむかしより。すでに姓名を鏨ちきて。洪に遇而開しあり。これまた開くべきを示せり。我つらつらおもふに魔王ハ蟄して石碑の下にこそあるらめ。そもそも人夫をまし加へて。掘崩させんと競ふ事ハ。住持おそれて又諫めけるハ。この処を堀せあらば恐ら天下に禍出来て万民一日も安からじ。只此まゝにして閣き給へといひあへぬに洪信大きにいかりて笑ひ愚なるものゝ。今分明に證迹ありて。これ遇て闢と鏨おきしをなどてか閣べき。そもそも焦燥を住持ともがらを諫むる

ぶる。洪信さらに人夫を集めすゞ徙石碑を
掘倒さゞ。下なる石亀を堀る事半日ばかり而して。この亀やゝ金身
を顕はさゞりしかば拉除るといへども紅ゝとあるばかりにて
てこれを傷ふ引除けゝるの下を二尺あまり堀つゝ射方四ゝ板のごとく圍
一丈もあるゝんとおぼしき青石あり。洪信これをこくいあゝ勇ましあは
下知を待ゝ。この石蓋をとり除させしに下に一つの穴あり。その深きこと
ばかりなるを知らざる時忽地天も摧地も塌て万竿の竹一度に裂百千の雷
半夜に隊るごとく音ゝ。雲か煙か隠くゝと一道の黒氣穴の内より立登り
殿の棟桁衝破りゝ。半天に赤引つて。碎ゝ百餘道の金光と変じ四
面八方に飛奔りぬ。諸人これを見しかばより。ふゝ驚き怕ぎゝ皆
殿内を逃出ゝて押倒さるゝ踏反さるゝ慌忙ゝ傷を蒙るものゝ多し。洪信

も顛つ倒つ廊の邊まゝ迯来ゝ面色土の如くにあり。忙然としてあり
しかば住持道衆もろ〳〵に集會太息つきゝせんすべを知らず且しらるゝ
人ゝ後ゝ住持洪信に對ゝいはく。抑この伏魔の殿とは當初祖
老天師洞玄老人法力をもつゝ。二十六員の天罡星。七十二坐の地煞星
すべゝ百八の魔王を鎖鎮上に石碑を立碑の面にて龍章鳳篆天
府の文字を鑿名示ゝ魔王を世に生じ誓ひ人を尉誤まて
これを放ち人民の災を禳ん爲の勅使にてあゝ。却ゝ災を惹き
ゝ。苦ゝしきかなゝ口説あゝ。洪信今さらに面目をうしなひ俄
頃に行装を整ゝ。やゝて京師にぞ馳りる。かゝゝ洪信八日あまり夜に
宿り既に都なる汴梁城に名ばかりの石ばかりの巷の堤を伝ゝ此度信
龍虎山の嗣漢天師張真人といふ道士の東京に来臨あるゝ。七日七夜乃


二百八の悪星
伏魔殿壊く

祈禱あり。近国民間の疫癘悉く除き去る。張天師はふたゝび鶴に乗り雲を凌ぎ。卒の山に帰りぬ。とゝひろて口頃ありて洪信この風声を聞て。さてハ位持らいひ〜に遠さりなり。と意うれ〜く。諸朝主上に見えまゐり張天師ハ神通をなり〜。東の間に来朝まゐらひ〜ゝどそれ〜らハ驛站てゆるゝ故。道中とゝ〜果敢とゝまゐ〜や〜。暇日京師住りゆひ〜。美〜ゝメえなれば。主上感ぜ〜〜〜。位に恩賞あり。官職舊のごと〜に〜あ〜〜と命。生さる三ゝる位天罡星地煞星化〜いうなるこの内なるそハ次の巻〜を讀得〜〜〜〜。

をすてつゝ君にとゝ思ひけり
いしの色多ゝ内ゝ

新編水滸畫傳卷之一畢

# 新編水滸畫傳

神書佛書醫書國學
繪本手本新古賣買
御注文ハ江戸橋通
後藤町三丁目八
河内屋孫兵衛

新編水滸畫傳
姫子小說
河